

2022年度

国際ユース作文コンテスト上位入賞作品

テーマ：「わたしの価値観」

公益財団法人 五井平和財団

www.goipeace.or.jp

2022.10.31

2022年度「国際ユース作文コンテスト」開催にあたって

この度、2022年度「国際ユース作文コンテスト」が盛大に開催されましたことを、心よりお祝い申し上げます。

一昨年以来、新型コロナウイルス感染症拡大の影響等により、コンテスト等の開催が困難な状況となる中で、今回の開催に至ったこと、関係者の皆様の熱意とご尽力に、あらためて敬意を表します。

今回のコンテストでは、「わたしの価値観」というテーマのもと、世界152か国の子供や若者たちから、約2万点にのぼる作品の応募が寄せられたと伺っております。

その中で今回、文部科学大臣賞を受賞されましたお二人をはじめ、各賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

先行きが不透明で予測困難なこれからの時代を生きる若者たちにとって、多様な考え方に触れ、相互の理解と尊重を深めながら、自身の価値観を磨いていくことはとても大切なことだと思います。

「国際ユース作文コンテスト」では、毎回すばらしい作品が数多く寄せられていると伺っております。このような取組を通じて、次代を担う世界中の若者が交流し、世界の平和と持続可能な社会・地域づくりにつながることを祈念しております。

令和4年10月31日

文部科学事務次官 柳 孝

2022 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

テ ー マ：「わたしの価値観」

参加国数：152 カ国

応募総数：合計 19,986 作品（子どもの部 6,507 作品、若者の部 13,479 作品点）

※学校名、年齢等の受賞者情報は、募集締切日（2022 年 6 月 15 日）時点のもの

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 「ありのままの自分」
佐藤 和花（東京都）12 歳

<若者の部>

- 「人を殺してはならない」
ソフィア（ロシア）20 歳

優秀賞（各 3 点）

<子どもの部>

- 「思いやりに新たな工夫」
ヒランガ・バンダラ・スラウェラ（スリランカ）11 歳
- 「大切なのは生きること」
パダルコ・アリーナ・アレクサンドロブナ（ウクライナ）13 歳
- 「耳をすまして寛容な社会を築く」
エローラ・キアー・ナレスワリ（インドネシア）14 歳

<若者の部>

- 「社会奉仕の価値を理解するための僕の旅」
イアン・ハリス・ハシム（マレーシア）15 歳
- 「バナナとしての価値観」
キヨー・リー（カナダ）15 歳
- 「私は平和」
エスティファノス・メコンネン・アテム（エチオピア）19 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- 「価値観とアイデンティティ」
アフィナ・リャン（米国）14 歳
- 「生死に関わる価値観」
アナスタシア（ウクライナ）14 歳
- 「変えてはいけない価値観」
染谷 真由（茨城県）14 歳
- 「今を生きる：出会ったチャンスを生かすことの大切さ」
早川 瑞希（東京都）14 歳
- 「わたしの大切な価値観」
吉田 朋加（東京都）14 歳

<若者の部>

- 「私の価値観、私の人生」
エニオラ・オルワトミン・デボラ（ナイジェリア）15 歳
- 「21 世紀を生きるためのわたしの『価値観』」
片山 芽生（東京都）18 歳
- 「私の価値観—命をつなぐための指針」
ガマリエル・ジョーダン・ブルカレス・ラングイド
（フィリピン）22 歳
- 「倫理規範」
トウイシミレ・テオジーン（ルワンダ<中国在住>）23 歳
- 「私の価値観」
ウデオビ・オビオマ・ジェニファー（ナイジェリア）23 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- 平子 翔貴（日本&中国<東京都在住>）8 歳
- アレフィン・カイサン・アラフ
（バングラデシュ<マレーシア在住>）10 歳
- 樽松 央真（群馬県）10 歳
- リー=ジョイ・ケンディ（ケニア）10 歳
- ガティク・ゴヤル（インド）11 歳
- チャケ レオン（ドイツ）11 歳
- ウマル・アブドゥルカドリ・オリタン（ナイジェリア）11 歳
- 平山 茜（兵庫県）12 歳
- 高橋 歩花（東京都）12 歳
- ヨーサム・フー・ユエ・ジェン（シンガポール）12 歳
- アリヤ・アフメド・ラシード（モルディブ）13 歳
- 藤井 陽紗（兵庫県）13 歳
- 御法川 慶大（兵庫県）13 歳
- 遠藤 百恵（福島県）13 歳
- 小俣 奈央（静岡県）13 歳
- 宇田川 おりぎ（東京都）13 歳
- スバルナ・ティミルシナ（ネパール）13 歳
- ユウ・ウェイ・シュアン（台湾）13 歳
- アナスタシア・ジバレーバ（ロシア）14 歳
- ダナ・ヤン（米国）14 歳
- カズ・ブランドン（米国）14 歳
- ムンムン・デイ（インド）14 歳
- 田中 翔（茨城県）14 歳
- シサム・バンダリ（ネパール）14 歳
- 藤井 かのん（東京都）15 歳

<若者の部>

- アイ・スー・サン（ミャンマー）15 歳
- フローレンス・アンジェリ・ダイロ（英国）15 歳
- 浄慶 栞（滋賀県）15 歳
- テジャスウィ・カティレディ（シンガポール）16 歳
- アルボゴチエバ・アミナ（ロシア）16 歳
- デビッド・ジュン・ソン（韓国）16 歳
- ファビアン・エゲデ・オグベウ（ナイジェリア）16 歳
- ラジワ・ナディア・ラティファ（インドネシア）16 歳
- 角 玲海（東京都）16 歳
- エリス・ギンパート（米国）17 歳
- ジェディダ・ワンガリ・チェゲ（ケニア）17 歳
- 三木 瑚子（兵庫県）17 歳
- 熊崎 心音（東京都）17 歳
- 福澤 こころ（埼玉県）17 歳
- パカポーン・ブンマック（タイ）17 歳
- ゼフラ・ウルスル（トルコ）17 歳
- シュリーナブ・モウジェッシュ・アグラワル（インド）18 歳
- アンジェリナ・アリシア・チュー（マレーシア）19 歳
- アナスタシヤ・ボホモルナ（ウクライナ）19 歳
- メアリー・ヒルダ・オバシオタ・ベン・イベ
（ナイジェリア）20 歳
- ノイ・ベン=セイド（イスラエル）20 歳
- グエン・ティ・バン・アイン（ベトナム）22 歳
- ジュン=ジュン・Q・アグスティン（フィリピン）23 歳
- ポリーナ（ロシア）23 歳
- アリサ・ステルリコバ（ロシア）24 歳

学校特別賞（3 校）

- 晃華学園中学校高等学校（東京都）
- 須磨学園中学校（兵庫県）
- 東京都立大泉高等学校附属中学校（東京都）

学校奨励賞（64 校）

- アルマディナ・スクール・カリフォルニア校
（モロッコ・カサブランカ市）
- アルマディナ・スクール・ポロ校
（モロッコ・カサブランカ市）
- 中部テネシー日本語補習校（米国テネシー州）
- 東京学芸大学附属世田谷中学校（東京都）
- 東京都立杉並総合高等学校（東京都）
- 東洋英和女学院 高等部（東京都）
- ドゥルゲル・セントラル・スクール（ブータン・パロ市）

- アンティーク専門学校ジャーナリズム特別プログラム
(フィリピン・アンティーク州)
- イスカンダル・スクール (モルディブ・マレ市)
- 板橋区立緑小学校 (東京都)
- FPT 大学 (ベトナム・ハノイ市)
- 大阪教育大学附属池田中学校 (大阪府)
- 大田区立大森第六中学校 (東京都)
- 大妻嵐山中学高等学校 (埼玉県)
- オゼル・カグダス・ピリム・カレッジ (トルコ・ムーラ県)
- 科学・芸術国際総合学校 (パキスタン・パンジャブ州)
- 鹿児島市立鹿児島玉龍中学校・高等学校 (鹿児島県)
- ギムナジウム・シュロバロバ (スロバキア・コシツェ市)
- ギヤサディン・インターナショナル・スクール
(モルディブ・マレ市)
- 京都先端科学大学附属中学校高等学校 (京都府)
- 居林覚民中学 (マレーシア・ケダ州)
- グアダラハラ大学附属第 11 高等学校 (メキシコ)
- 公民国民型華文小学 (マレーシア・ペナン州)
- コレジオ・ビタル・ブラジル (ブラジル・サンパウロ州)
- コレジオ・ドクター・ウォルター・ベラン
(ブラジル・サンパウロ州)
- コロトラン地域高等学校 (メキシコ・ハリスコ州)
- サトリウィタヤ学校 (タイ・バンコク都)
- サント・トマス小学校分校 (フィリピン・ラグナ州)
- シカゴ双葉会日本語学校補習校 (米国イリノイ州)
- シドニー日本語土曜学校
(オーストラリア・ニューサウスウェールズ州)
- ジャマルディン・スクール (モルディブ・マレ市)
- 常総学院中学校・高等学校 (茨城県)
- 城南学園中学校・高等学校 (大阪府)
- 昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校 (東京都)
- スリ・ニパー国民中学校 (マレーシア・クランタン州)
- セント・ジョージズ・スクール
(ブルネイ・ブルネイ・ムアラ地区)
- 第 11 学校 (ウクライナ・チェルカッシー州)
- タマン・ペランギ・インダ中学校
(マレーシア・ジョホール州)
- テサロニキ市立アルサケイオー中等教育学校 (ギリシャ)
- 東京学芸大学附属世田谷中学校 (東京都)
- 富山国際大学付属高等学校 (富山県)
- 東洋英和女学院 高等部 (東京都)
- ドゥルゲル・セントラル・スクール (ブータン・パロ市)
- 奈良学園登美ヶ丘高等学校 (奈良県)
- 南台科技大学 応用日本語学科 (台湾台南市)
- ナンファア小学校 (シンガポール)
- 延岡工業高等学校 (宮崎県)
- バイオテクニカル・センター・ナクロ
(スロベニア・ゴレンスカ地方)
- パルジャグリティ英語中等教育学校
(ネパール・バグマティ州)
- 不二聖心女子学院中学校 (静岡県)
- ビーコンハウス・スリ・イナイ・インターナショナルスクール
(マレーシア・セランゴール州)
- 福岡県立小郡高等学校 (福岡県)
- 福島県立会津学鳳中学校・高等学校 (福島県)
- ブハラ地域カラブルバザール地区第 1 学校
(ウズベキスタン・ブハラ州)
- プレスト第 1 学校 (ベラルーシ・プレスト市)
- 平安女学院中学・高等学校 (京都府)
- PECHS 女子校 (パキスタン・カラチ市)
- ボストン教育センター
(米国カリフォルニア州ロサンゼルス市)
- マインデンハイト高等学校 (マレーシア・ペナン州)
- マザーランド中等教育学校 (ネパール・ポカラレクナス市)
- 松本秀峰中等教育学校 (長野県)
- ミラノインターナショナルスクール (イタリア)
- ミラノ補習授業校 (イタリア)
- 武庫川女子大学附属中学校・高等学校 (兵庫県)
- ムティアラ・インターナショナル・グラマースクール
(マレーシア・セランゴール州)
- 山口県立華陵高等学校 (山口県)
- 山ノ内町立山ノ内中学校 (長野県)
- ヤロスラブリ産業経済大学 (ロシア)
- ラブアン・インターナショナル・スクール
(マレーシア連邦領ラブアン島)

国際ユース作文コンテスト選考委員（＊敬称略・50音順）

委員長	千 玄 室	茶道裏千家前家元、ユネスコ親善大使
	西園寺昌美	公益財団法人 五井平和財団会長
	都倉 俊一	作曲家
	成田 純治	株式会社博報堂相談役
	服部 真二	セイコーグループ株式会社代表取締役会長兼グループ CEO 兼グループCCO
	松浦晃一郎	一般社団法人 アフリカ協会会長、元ユネスコ事務局長
	美内すずえ	漫画家
	矢崎 和彦	株式会社フェリシモ代表取締役社長
	葉 祥 明	絵本作家
主 催	公益財団法人 五井平和財団	
後 援	文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、日本私立中学高等学校連合会、 東京都教育委員会、NHK 日本経済新聞社	
協 賛	セイコーグループ株式会社、プラス株式会社	

ありのままの自分

（原文）

佐藤 和花（12 歳）

東京都

東京都立大泉高等学校附属中学校

私は、他の人と好きなものや苦手なものが違うことが多いので、よく人に「変わっている」と言われます。

昔、私の好きなものが否定されたことがあります。そして「変わっているね」と言われ、周りとは違うのだと気づき、とても傷つきました。その時からまた同じようなことを言われるのが怖くなり、ありのままの自分を伝えることが少なくなりました。

その後、仲の良い友達と休み時間に話していました。最初、テレビや音楽などの楽しい話をしていましたが、チャイムが鳴ると「最悪」とみんなが言い始めました。私は理由がわからず戸惑っていると、目に入ってきたのは時間割です。次の時間の教科を確認すると、そこには「算数」と書かれていました。みんな算数を嫌がっていたのかと考えながら支度をしていると、一番仲の良い友達が私のところに来て「算数嫌だよ」と同意を求めてきました。そのとき私は言葉に詰まりました。算数がものすごく好きだからです。しかし、仲の良い友達はみんな算数が嫌だと言っているため、「そうだね」と答えました。

別の日、同じ友達と音楽の話をしていると、友達はゆったりしていて落ち着いた流行りの曲が好きだと言いました。正直なところ、私は速い曲の方が好きだったので、その曲が好きではありませんでした。しかし、友達が「神曲」「好きじゃない人なんていない」と言っていたため、私も仕方なく好きだと伝えました。

この前までは、このように友達と合わせていれば程よく良い関係を保てるため嘘をつくことが多く、それを良い嘘だと思っていました。周りからも話が合う相手として話しかけられていて、自分では満足しているつもりでした。

しかし、毎日そうして過ごしているうちに、本当のことが言えないということが辛く感じるようになりました。そして、他の人は好きなものは好き、苦手なものは苦手とはっきり伝えているのに、自分だけ伝えられていないということに疑問が生まれました。本当に伝えてなくていいのか。ずっと本当の自分を知ってもらえないままでいいのか。そのようなことを考えるうちに、次からははっきりと伝



えることにすると決断しました。

次の日、また算数があり、友達は変わらず嫌だと言っていましたが、「私は算数好きだから楽しみ」と伝えました。最初、友達には驚かれ、「算数が好きな人なんて見たことない」と言われました。少し傷つきはしましたが、それ以上に伝えることのできた喜びが大きかったので、あまり気にしませんでした。

その後も本当に好きなものを伝えるうちに、「変わっているね」と昔と同じことを言われました。しかし、私は不思議なことに全く傷つかず、むしろ嬉しく感じました。そして、「変わっている」ということを誇れるようにまでなりました。すると、自然と周りにも認められていくようになりました。

今、考えてみるとそれは、自分でありのままの自分を受け入れることができ、よってそれが他の人にも伝わったのだと思います。

「自分に嘘をつかずに自分を受け入れ、他の人にも受け入れてもらう」。これが今の私の価値観です。

価値観は人それぞれですが、私はこのことが何よりも大切に、自分が幸せに生きていくために欠かせないことだと考えています。周りを怖がらず、自分の意志で行動することで、いつか周りにも認めもらえるようになると思います。そのため、これからも私の価値観を大切に生きていきたいです。

人を殺してはならない

（原文は英語）

ソフィア（20 歳）

ロシア

私にとって、それはずっと疑うことのない明白なことだった。証明を必要としない自明の理。火は熱く、氷は冷たく、全ての命は大切である。人に説明する必要のないことだ。

しかし、3カ月ほど前にそれは変わってしまった。私の住む国が「戦争」を始めたのだ。

戦争。それはどこからともなく現れ、私たちの頭を直撃する。亡くなっていく人々や、家族や家を失った人々に対する痛み、戦争を止められないことに対する絶望、どのような終局を迎えるのかという恐怖が、全て一度に自分の中に広がっていき、どこかに隠れ、全てを忘れ、これは嘘だと信じなくなる。でも、これは現実である。自分が生きている世界は一変したのだ。

これまでずっと信じ、大切にしてきた自分の価値観、自分の人生の原理原則の基礎を成していた価値観が、この「戦争」という残虐で破壊的な炎によって全て灰にされてしまったように感じる。

平和。

私は子どもの頃から平和に暮らすことの大切さを教わってきた。誰もみな、第二次世界大戦で支払った高い代償を覚えている。あれほどの残酷さと暴力があったにもかかわらず、私たちの先祖の献身と勇気によって、私たちは平和な未来を生きる機会を与えられた。

しかし、現在起きている悲劇は「戦勝記念日」に新しい意味を与えている。まさにこの日と時を同じくして、隣国の人々は自分たちの頭上に青空を取り戻すために戦い、亡くなっていることを思うと、私にはこの日を祝うことは不可能に思える。都市の爆撃を命令した人間が、記念碑に花を手向けることで戦死した英雄たちを追悼するこの良き日は、偽善と嘘にまみれている。私の頭の中では、祝祭の花火と集中砲火の轟音は共存できない。

言論の自由。

これ以上ひどいことなんてあり得るだろうか。それがあつのだ。それは、今起きていることについて公然と話すことができないことだ。自分の意見を誰かと共有しようとすると、言論の自由が錯覚であることがたやすく明らかになる。たった一つの「間違つた」言葉——「戦争」——が爆発を引き起こす火花になりかねないのだ。私たちは「それ」をそう呼ぶことも、「それ」に反対の声を上げることも、平和を望むことも許されていない。

罰せられることなく、自分の意見を共有できる世界に生きることに私は慣れてきた。さまざまな観点から物事が報じられるのを聞いていたことを覚えている。しかし、それももう終わりだ。政府に賛

同しない人間はみな「外国のスパイ」と呼ばれる。これは絞殺に等しい。私は実際に自分の首が縄で強く締めつけられているように感じ、今にも息が詰まりそうだ。

人間の命。

なぜ人は、罪もない人々を殺す口実を探しているのか。なぜ彼らは他人の生活を壊す権利があると思っているのか。虐殺は悲劇かつ陰惨であり、絶対に正当化されてはならない。

当然のことなのに、私はそのことを証明しなくてはならない。

「あなた、本当に分からないの。人が死んでいるのよ!」。私は涙が顔を流れ落ちるのをこらえながら声を限りに叫んでいる。

「それは彼らの自業自得だよ」

「あなた、テレビを見てないの?」

「政治はそんなに単純なものじゃないんだよ」

一つ一つの言葉が弾丸よりもひどい打撃を私に与え、私の傷ついた心に次々とぼっかり穴を開けていく。彼らの目に浮かぶ自信や冷たい無関心は、私の魂と心に恐ろしさのあまり涙を流させる。世界は狂ってしまったのか。私が何か見逃しているのだろうか。

違う。私は何も見逃していない。それは確かだ。そして、私の馴染みのある世界が崩壊し始めている今、私の持つ信念が私を踏みとどまらせ、状況を理解するのに役立っている。

私のことを世間知らずだという人もいるだろう。でも、私は善は悪に勝つと信じている。それに、私は独りではないことを知っている。力を合わせれば状況を変えられると信じている。平和、言論の自由、人の命。これらのために私は立ち上がる。これらが「私の価値観」だ。

そして、私は正しい。なぜなら、それはとても単純なことだからだ。

人を殺してはならないのだ。

思いやりに新たな工夫

(原文は英語)

ヒランガ・バンダラ・スラウェラ (11 歳)

スリランカ中部州

トリニティ・カレッジ

数週間前、僕は学校に行く途中で、これまでに見たこともないものを目にしました。LPガスのスタンドや販売所に長い行列ができていたのです。スーパーマーケットは、ショッピングカートに品物を山のように積んだ買い物客でいっぱいでした。そうした光景を通り過ぎながら、僕は両親が「インフレ」という言葉を使っているのを耳にしました。町の中心部では、黒い服を着た人たちが黒い旗を持って抗議しています。学校に行くと、いつもより少数人の児童と先生しか来ていませんでした。燃料が不足し、住んでいる地域の公共交通機関が機能しないため、多くの人たちが学校に来られなかったことを知りました。どこもかしこも不満と失望でいっぱいでした。

こうした悲しい光景を目にした僕は、自分がとても大切にしている二つの価値観があれば、僕にはたくさんことができると思いました。それはカインドネス（思いやり）とマインドフルネス（心くばり）です。僕は最近読んだ本にあったように、この二つの言葉を一つにして「カインドフルネス」と呼ぼうと思います。思いやりと心くばりによって僕が実現したいのは、知恵を集めて僕の周りの社会的問題を解決するということです。知恵は自分の心に落ち着きがないとわいてきません。知恵は自分の心が静かで穏やかなときにはじめてわいてきます。

どうすれば「カインドフルネス」で問題を解決できるのか。この数日間に僕がしたことを話します。僕は両親と一緒におやつを作って飲み物を買って、LPガスのスタンドや販売所で並んでいる人たちに配りました。このアイデアを思いついたのは、炎天下で長時間並んでいる人たちを見ると、のどがカラカラになっているのがわかったからです。ほんの小さな思いやりでしかないかもしれませんが、きっとその人たちの心を元気づけて最後まで待ち続ける力になるだろうと考えました。

僕は最近、スタンドで並ぶ時間を家族の時間に変えようと両親に提案しました。両親が忙しくて、僕にも学校でやるのがたくさんあるので、一緒に過ごす時間はほとんどありません。ですが今は、車に軽食を持ち込んだり、時には僕のギターを持って行き、皆で歌ったりしながら、給油の順番が来るまでの待ち時間を楽しく過ごしています。正直今ではスタンドで並んでいるのが楽しくなりました！僕の母はこうした経験をメッセージアプリでシェアするようになり、今では母の友人の多くが同じことをしているそうです。

僕の友だちの誰かが交通手段がないから学校に来れないと連絡が入るたびに、僕は両親と一緒に

誰かその友だちが住む地域を通る人で、その子を拾って学校まで連れて来てくれる人がいないか探します。通学の問題をさらに解決するために、僕は同級生と話し合っただけでカープール（相乗り）を始めることにしました。この取り組みは親切なだけではありません。一台の乗り物を何人かの乗客でシェアするので、世界的なエネルギー危機を乗り越えるための一つの方法になります。後になって僕はこのことを公民の授業で知りました。

最近ではニュースを見るたびに、世界中のあちこちで戦争や内紛が起きているようです。その理由は人々の心にたくさんの欲求や欲望があるからです。心に落ち着きがなく、物事をありのままに受け入れられないと欲求が生まれます。与えられたものが何であれ、誰もがそれに満足できるような日が、そう遠くないうちにやって来ることを僕は願っています。これを実現するためには、思いやりと心くばりという僕が大切にしている二つの価値観、合わせて「カインドフルネス」を強く勧めます。ここで話した僕の経験からわかるように、とてもネガティブに思えることでも、自分自身や他人を思いやる機会にしようと心くばりをすれば、それをポジティブなことに変えられる、これは素晴らしいことです。

大切なのは生きること

(原文は英語)

パダルコ・アリーナ・アレクサンドロブナ (13 歳)

ウクライナ・ハルキウ市

ハルキウ第 43 学校

2022年2月24日のウクライナ・ハルキウ。私は朝4時ごろに爆発音で目を覚ましました。両親の部屋に行き、「聞こえた？ 何が起きてるの？」とたずねると、こう返ってきました。「戦争が始まったんだ」

同級生の両親からは、子どもは学校には行かせない、自分たちも仕事には行かない、皆で町を離れるという連絡が入り始めました。このときの私にはわからないことだらけでした。そんなに大変な状況なのか。急いで町から避難しなければならないなんて、2日後には去年から準備してきた、私の一番大切な人の誕生日会があるのにお祝いできないなんて、家族や友人が皆「生きています？」と連絡を取り合うなんて、最悪でした。

この21世紀に、祖母のキュウリやトマトの様子を見るためでなく、隠れるために地下室に入ることになるなんて私は思ってもみませんでした。

隠れ家に着いても私は自分の存在をそこから消そうとしました。目を閉じ、耳を閉ざし、ただの夢なんだろうと思うようにしました。すると世界的に有名なある言葉が思い出されました。「自分が持っているものに感謝しなさい」。それまではあらゆることが平凡で、どこか退屈で活気のない日々の日課のように思っていました。でも今の私に大切なのは何か。

私には命が大切です。これまでよりもっと命に感謝し、大切に思うようになりました。今日が自分の最期の日になるかもしれないと知っているから。次に飛んでくるミサイルや爆弾、飛行機がどこに落ちるのか、どこを攻撃するのかわかりません。生きてると良いことやうれしいこともあれば、悪いことや危険なこともあります。たとえ地下室の中でもそばには両親がいます。幸運を信じ、希望を失わず、じっと待つように励まし、助けてくれます。

私は生きることについて考え、それがどのようなものだったかを思い出してみます。毎朝学校に行く、帰って来て宿題をする、母とジムに行く、友だちの犬と一緒に散歩に行く。笑ったり、うれしかったり、成績が悪くて泣いたりする。生きていたときのこうした瞬間はどれもとても大切です。そうした瞬間は長くは覚えていませんが、思い起こすと、生きていた実感がわいてきます。

感謝し、愛し、喜ぶこと。命は贈り物です。そのことがわかれば、私たちが歩いていく道も人生も最善の方向に進んでいくでしょう。

今日、明日、1週間後に起こることは予測できません。ですが未来を築くことはできます。私が大切に思うことが私の未来を作り出します。

耳をすまして寛容な社会を築く

(原文は英語)

エローラ・キアー・ナレスワリ (14 歳)

インドネシア南ジャカルタ市

バクティ・ムルヤ第 400 学校

私の家の隣には敬けんなキリスト教徒の家族が住んでいます。毎年クリスマスを迎える時期が来ると、とても幸せそうです。クリスマスはキリスト教徒の人たちにはとても特別な祝い事です。その日の午後、私は隣の家族がテラスで植木にきれいなランタンを飾りつけしながら賑やかにしているのを目にしました。クリスマスの賛美歌が流れ、それに合わせて歌っています。私が住む地域ではこれが慣例となりました。宗教的な祝日には、私の家族や近所の人たちが互いに食事をふるまいます。例えば、「イド・アル・フィットル」というイスラム教の祝日には、「クトゥパツ」【訳注：ヤシの葉で編んだ包みに米を入れて蒸した、ちまきのようなもの】と「チキンオポール」【訳注：鶏肉をココナツミルクで煮込んだ料理】を贈り合います。また、イスラム教徒は「イド・アル・アドハー」の時期には、宗教に関係なく、この地域の人たち全員に水牛の肉を必ずふるまいます。

クリスマスを祝う日にも、キリスト教徒の隣人は自宅の前を通り過ぎる人たち全員にきれいに包んだケーキを配ってくれます。おまけにイスラム教のハラール料理をふるまうために、私たち家族を自分の家に呼んでくれました。すると上のテラスから声がして彼女のお父さんが一番下の子に言いました。「ローラ、ローラ、歌をやめなさい！ マグリブのアザーン（日没礼拝の呼びかけ）だよ」

すると突然、その日の午後に流れていた賛美歌が止み、この地域にあるいくつかのモスクからアザーンが響き渡りました。私はイスラム教徒に課された義務である日没礼拝の前に急いでウドゥ（水で体を清めること）を行いました。清らかな水が顔を濡らしていくのを感じながら、私は心が穏やかになっていく感覚を覚えました。そしてつぶやきました。「今日の午後は二つの声が代わる代わる耳に入ってきた。互いの信仰は違うけれど、もちろんどちらも目的は同じ、あらゆる人を善に導くこと」

黄昏はいつも美をもたらします。この日の午後のように、黄昏は人間のエゴを消し去り、耳に聞こえてくるものを通じて寛容の意味を教えてください。寛容は大切でしょうか。そう、大切です。宗教、文化、民族、人種、肌の色がさまざまに異なる国に暮らす私たちにとって寛容は価値あるものです。なぜなら人々の間には違いがあるせいで起きてはならない衝突が起きることが多いからです。宗教儀式の最中に教会が爆破されたり、モスクが燃やされたり、宗教指導者が脅迫されて負傷したりする事件が実際に起きています。だからこそ、インドネシアではすべての国民にとって今も寛容が大きな望みなのです。この国は悪いことを企む人たちによって、その多様性やさまざまな違いが国民をあお

り立て、分断するための道具に利用されています。他に勝りたいという自分本位の思いから生まれるエゴが、この国にもたらしたのは国民の分断と互いへの敵意でした。

しかし私が住む地域では、人々の寛大さによって寛容の精神が育まれています。社会にある違いは、隣人同士の永遠の愛を育み、いつまでも寄り添い合うための強力なエネルギーへと変化してきました。ならば違いが衝突を引き起こさないようするためには誰が一番の責任を担い、誰が寛容の精神を次の世代に伝えていくのでしょうか。その答えは、この国の国民全員です。全員が責任を担い、受け継いでいくことです。今の世代がこれから担う大きな課題は、この地球上のあらゆる違いに対する寛容の精神を次の世代に伝え、調和に満ちた平和な世界で社会を築いていくことです。そのために私たちは、寛容の精神を壊そうとする人たちの挑発に簡単にのせられないように、どんな小さなことでも耳をすまし、違いの素晴らしさを楽しめるように、自分の耳でその違いを聞き分けるのです。

社会奉仕の価値を理解するための僕の旅

(原文は英語)

イアン・ハリス・ハシム (15 歳)

マレーシア・クアラルンプール市

チェムパカ・インターナショナルスクール

価値観は人生に明確な目標を与えてくれる。前向きな価値観は日常のさまざまな場面での振る舞いや行動の指針となり、通常は僕たちを良い方向に導いてくれる。正しい価値観を持つことで人生の進路、つまり、自分たちの行動、人との関わり方や人への対応の仕方、自分の人生に大きな影響を与える重大な決断の仕方が決まる。価値観は社会において重要な役割を果たしていると僕は信じている。そして、活発な社会の一員として、社会奉仕・ボランティア活動・チームワークという価値観はとても重要だと思っている。これらの価値観は、健全な良い地域社会の基礎となる。人はその人が育った社会によって形作られると僕は信じている。人は経験から学び、価値観によって導かれる。その人が優しいか意地が悪いか、正しいか間違っているか、それら全てを決定するのは、その人が生きてきた環境である。なぜなら環境がその人の性格を形成するからだ。

僕が大切にしている価値観の一つに「社会奉仕」を挙げたが、僕にとって社会奉仕とは、自分のコミュニティでの取り組みや運動に協力したり貢献することだ。少し無理をしてでも他の人のために何かをすることは、大変な努力と意欲を必要とすることだと言う人もいるだろうし、誰もができることではない。僕も以前は、自分の問題ではないことや自分には関係ないことであれば、無視して放っておけばいいと思っていた。しかし、僕の人生を変えた、ある奉仕活動に関わったことで、僕の考え方は変わった。

新型コロナウイルス感染症大流行の第1波が来た時、マレーシアは完全に封鎖された。仕事や学校、用事を済ませるためであっても、不必要に家から出ることは許されなかった。ウイルス感染から身を守るため、家族は自宅待機を強制された。この方法はしばらくの間はうまくいっていたものの、国内で予期しない悪影響が、特に社会経済的な面で起こり始めた。多くの人は働けないために、日々の生活に苦しんでいた。低所得者層の人々は最も大きな打撃を受けた。影響を受けた人々の悲痛や絶望の叫びでニュースは埋めつくされた。

この出来事は僕をととても苦しめた。多くの家族が空腹に苦しみ、家賃やその他の支払い、あるいは生活必需品の購入ができないことを考えると落ち着かなかった。うちの家族はこれらの問題を回避することができていたため、僕は家で快適に過ごしていた。自分の周りで起きている問題を無視し、隔離された気楽な世界の中で過ごすこともできたが、どうしてもこのことが頭から離れなかった。

そこで、僕は何か行動を起こそうと決心した。弟と一緒に、困っている人たちを助けるための資金を集めるため、オンライン募金運動を始めることにした。パハン州にある児童養護施設を支援するための寄付金を、友達や家族から10リングット（2.50米ドル）という少額から集められたらと思い

「@The10RinggitProject（10リングットプロジェクト）」というInstagramのアカウントを立ち上げた。募金運動は成功し、1週間で16,000リングットを超える寄付金が集まった。児童養護施設にこのお金を渡した時、これが施設の負担を軽くするのに役立つと、僕は幸せな気持ちでいっぱいになり、もっと人を助けたいという気持ちになった。

それ以降、僕たち兄弟はさらにいくつかの募金運動を立ち上げ、病院や児童図書館、洪水被災者などの救済に役立てた。この2年の間に、140,000リングットを超える資金を集めることができ、その全額をそれぞれの寄付先に送った。その効果はとても大きかった。僕たちの元には、児童養護施設への真新しい家具・本・洋服、病院への機器、そして図書館への本や設備など、僕たちの運動によって購入できた物の写真が届いた。しかし、その写真の中で僕の目を引いたのは、たくさんの新しい品々ではなく、それらを受け取った人たちの感謝の気持ちが込められた輝く笑顔だった。それを見て僕は「社会奉仕」という価値観を大切にすると決めた。社会奉仕に参加することで、僕は自分のコミュニティに恩返しすることができ、他の人の人生に良い影響を与えることができる。それによって、僕は誇らしさを感じ、今後も続けようという意欲がかきたてられるのだ。

バナナとしての価値観

(原文は英語)

キヨー・リー (15 歳)

カナダ・オンタリオ州

バナナ。外は黄色くて中は白い。「バナナ」という言葉は「東洋文化」に従わず、西洋社会に同化しているとされるアジア人やアジア系アメリカ人を表すのに使われます。この「バナナ」というあだ名は、固定観念や心理的差別、人種的偏見、アジア人に対する憎悪を表す言葉として、子ども時代の私に付いて回り、私の個人的・社会的・文化的価値観に大きな影響を与えてきました。

私は幼い頃に韓国からカナダに移住し、北米文化にすぐに適応しました。その結果、私の思春期の前半と家庭環境は主にアジア文化の影響を受けましたが、私の青春時代の大半は西洋的価値観によって形作られました。これはたびたび原則の矛盾を生みました。例えば、ほとんどの西洋社会で個人主義が拡大し続けるのとは対照的に、東洋社会の多くが集団主義であり、それは私の人間関係に対する認識を混乱させました。私の仕事や社会問題に対する考え方、意見から昼食や身に付けるものまで、あらゆるものに対する私の価値観は、いつもさまざまな要素で作られていました。

しかし、移民として育った私は、常に西洋社会に完全に同化しようと努力してきました。同化は社会に受容され、帰属することを意味し、その一方で抵抗は異国のものと見られ、冷笑され、人種差別を受けます。西洋メディアは、白人の登場人物を好意的に描くと同時に『アイアンマン』のマンダリンや『すてきな片想い』のロン・ダク・ドンに見られる黄禍論のように、アジア人を差別的に描きます。これを見るたびに、そして「アジア人にはイケてるね！」といった皮肉なほめ言葉を受けるたびに、私の中で自分の文化に対する印象は悪くなる一方でした。さらに、欧米の帝国主義や文化植民地主義の強い影響を受けている韓国の伝統も、同化を促すプレッシャーに拍車をかけていました。

いろいろな方法を通じて、私は「内も外も白ければ白い方が良い」と言われ続けてきました。「自分の典型的なアジア人である部分は全て良くないものだ」という原則が身に付いてしまった私は、自分の中の韓国的な哲学を完全に排除しようとしました。個人主義を強化するためにわざと家族と距離を置いたり、儒教の伝統である学習に反発するためにわざと成績を下げたりしたこともありました。

「バナナ」である私は、いつもアジア人過ぎるあるいは白人過ぎると言われ、常にアジア人としても白人としても不十分でした。まるで完璧に分類された果物のグループのどこからも除外された1粒のベリーです。私は自分の母国を故郷として受け入れず、アメリカは私をその一員として認めてくれませんでした。

しかし、地理の授業でさまざまなグループの若者たちが体験した文化的葛藤について、彼らにイン

タブーをする映像を見て以来、私の考え方は全く変わりました。この複雑な社会的分断は多くの人に共通する経験だと知ったのです。私は独りではありませんでした。若い人たちが自分の多文化性を受け入れる中での葛藤を語るのを聞き、私の中で「自分は何者なんだろう」「私の価値観は何だろう」という疑問が湧いてきました。

これまで私は、アジア人であることと白人であることは相いれないと思いつけてきました。私が白人になりたいと思い、この国になじんでアメリカを自分の故郷と呼びたいのであれば、私の中のアジア人としての価値観を捨てなくてははいけないと思っていたのです。でも今は、複数の文化の雑多な組み合わせでもいいのだと知りました。私は現在、より正確に自分が誰であるかを表現できるよう、そして、人間関係や経験、伝統、独自性など自分の全てを包含するために、自分の価値観を構築し直している最中です。

私の心にあるものは、平等、共感、勇気、謙虚さ、そして愛です。私はアジア系アメリカ人のための正義、先住民との和解、人種差別反対、文化的多様性、芸術、教育、人間関係の構築を信条としています。私の価値観は、アジア系移民、2SLGBTQ+の女性、友人、娘、学生、一人の人間、独自性、そして「バナナ」としての経験から得た色とりどりの断片でできた、唯一無二のモザイクです。

これらの価値観は、私自身と私の周りの世界を定義しています。現在、私は自分の自覚していない差別を認め、自分自身が学ぶと共に周りの人にも伝え、さまざまな組織や運動を通じて、自分の住む地域や世界に向けてアジア系アメリカ人の権利を訴えることに取り組んでいます。

私は今、自分自身にとって「アジア系アメリカ人」が何を意味するのかを定義している最中です。なぜなら、アジア人であることは画一的な体験ではなく、また、生物学的あるいは地理的な状態を定義するものでは決してないからです。それは、幅の広い概念であり、私たち一人一人がそれぞれの形に作っていくべきものなのです。私は黄色や白色という単純な色になり下がるつもりはありません。私の人生は、たくさんの虹でできた、もっと複雑な物語だからです。

参考文献

ケイトリン・ヨシコ・カンディル (Kandil, Caitlin Yoshiko) 「『アジア系アメリカ人』という言葉ができて50年たった今、権利活動家は、この言葉が『これまでになく不可欠になっている』と語る

(After 50 years of 'Asian American,' advocates say the term is 'more essential than ever.)」NBCニュース (2018年5月31日)

<https://www.nbcnews.com/news/asian-america/after-50-years-asian-american-advocatessay-term-more-essential-n875601> (参照日：2022年6月13日)

リリアン・ミン (Min, Lilian) 著「バナナの罠：アジア系アメリカ人と『船で届いたばかり』」

(The Banana Trap. Asian-Americana and “Fresh Off the…”) 『Medium』掲載『THOSE PEOPLE』オンライン誌 (2015年2月23日)

<https://medium.com/thsppl/the-banana-trap-48d25455429e> (参照日：2022年6月13日)

私は平和

(原文は英語)

エスティファノス・メコンネン・アデム (19 歳)

エチオピア・バハレダール市

それは、これまで聞いたことのない奇妙な声だった。最初は嵐かと思ったが、夏に嵐などあるはずがない。するとベッドが揺れ始め、窓やドアも揺れ始めた。地震かもしれないと思ったが、これまでこの村で地震が起きたことはない。地理の授業で地震は地溝帯でしか起きないと学んだが、私の村は地溝帯にはない。その後、爆発音のような音が聞こえ、家はその音に囲まれた。そして、5秒ほど揺れを感じた。私は祖母の家において、そこには私たち2人しかいなかった。私の寝室の隣の部屋にいた祖母の「始まった！」という声が聞こえた。

私の国エチオピアは、2019年11月以降内戦下にある。開戦以降、それまでと生活が全く変わってしまった。私たちは毎日、戦火が私たちの町や村にまで及ぶのではないかと怯えながら生きていた。現在、戦争は終わったが、私たちは平和でも戦争でもない状況にある。平和なことで世界的に知られる国で暮らしていると、恐怖を感じることなく朝出かけ、やりたいことをし、家に帰ってくることの価値に、その平和を失うまで気づかない。しかし、何かの価値を知るために、それを失うまで待ってはいけなと思う。私の場合、平和がどれほど価値のあるものなのかに気づくのが遅すぎた。戦争という体験によって目を覚まされたと言える。しかし、私たちが目覚めるのに、一体いくつの爆発が必要なのだろうか。平和が価値のあるものだとして理解するのに、どれだけの苦しみと失われた命を見ることが必要なのだろうか。人類は嫌というほどの流血、戦争、苦しみを見てきた。それらと引き換えに私たちは何を得たのか。何も得られていない。失われた命は戻らず、残された人々はまだ何か得るものがあるかのように戦い続けている。

以前の私が誰かに自分の価値観は何かと聞かれたら、達成感や野望、倫理、家族、友情と答えていただろう。私たち人類は、平和を価値として認めていないからこそ、平和を維持することができないのだと思う。今は世界のどこであれ、戦争が唯一の紛争解決手段となっている。人々は暴力でしか自分の声を聞いてもらえないと考え始めている。平和は今あるものではなく、かつてあったものになりつつある。時の経過と共に、私たちは平和に暮らすとはどういうことかを忘れつつある。あの夜、祖母はとても冷静であり、その理由をずっと不思議に思っていた。そこで、次の日に理由を聞いてみると、祖母はこう答えた。「私が若い頃はみんな仲良く暮らしていた。人々は話すよりもよく人の話を聞き、世界をより良い場所にするだけを考えていた。でも、時間が経って、人々がより多くを求めると、私たちは駄目になり始めた。今の世代は知識、自由、情報、全てを手に入れたにも

かかわらず、その無限の欲望が人間であることを忘れさせ、そして、人間らしさを失ってしまった。その時、チャンスがあるうちに大切にしていなかった平和が失われるのは、時間の問題だと確信したのよ」

平和は私たちの内から始まる。平和を愛する人は常に平和を促す。私は、世界の一市民として平和を維持することが最大の関心事である社会を作りたいと思っており、いつ、どこでもそれを訴えていくつもりだ。安心して子どもを持つことができる世界、彼らが傷ついたり命を落としたりするのではないかと怯えることのない世界にしていきたい。この世界が、誰もが行きたい場所に行き、生きたいように生きられる、最高に安全な場所になるよう願っている。私は平和な世界に生きる平和的な人間になりたい。私たち自身が心安らかであれば世界も平和になる。だから、平和を大事にしよう。平和になろう。

価値観とアイデンティティ

(原文は英語)

アフィナ・リャン (14 歳)

米国カリフォルニア州
キャニオン・クレスト・アカデミー

私が自分の個性に目覚め、世界を違う視点から見るようになったのは14歳になってからだ。現実の世界に少しずつ足を踏み入れるにつれて、それまでの純粋な自分が粉々になっていくのは刺激的で驚きの連続だが、危険でいら立ちを覚えることもある。物事の影響を受けやすい若い年齢だと、自分が誰であるのかを忘れて、集団の中に埋もれてしまいやすい。10代という時期は個人のアイデンティティと世界観を形作るプロセスにおいてとても重要だ。サナギの外に初めて出るのだから知識や経験もない。私にとって自分が大切にする価値観とは、他の人たちと共に学んだりコミュニケーションしたりすることで得られる考えや教訓のようなものだ。まるで自分が未完成のパズルのように、欠けているピースをメディアや家族・友人、本を通じて社会の中から見つけ出してくる必要がある。ただし、正しいピースを見つげ出すには前提条件というか、必須条件がある。心を開くことだ。

中学校に入ると私は初めて人間の多様性と一人一人が持つ物語に気づいた。もし自分が新しい人たちとの出会いに心を開かなければ、今の親友たちとは決して知り合うことはなかっただろう。たとえ考え方が食い違っても、心を開けば物事を新しい視点から見るようになり、機会にも恵まれる。頭から相手を否定しなければ強い絆が生まれ、相手に共感できるようになる。人間はコミュニケーションを取り、何かを共有してはじめて互いを理解することができる。これが私の2番目の価値観へとつながる。相手を否定する前に共感するということだ。共感とは同情や哀れみとはまったく異なり、自分が聞き手になり、相手の身になることをいう。作家のハーバー・リーが『アラバマ物語』(原題: To Kill a Mockingbird、原題直訳: ものまね鳥を殺すには)の中で、共感とは「その人の皮膚の中に入り込みその人の中を歩き回る」ことだと巧みに表現している。心を開くには勇気と自分をさらけ出すことが必要だが、相手を知ろうとする努力も必要だ。そうした障害や恐れを乗り越えることができれば、物語の中でリーが書いたように「深く知れば、たいていの人は(良い人)」であることがわかる。

他人を受け入れて理解すれば、自分なりの価値観や自分自身の一部を作り上げることにつながる。探求するのを拒むということは、無知で偏見を持つことと同じだ。自分の偏見で他人を枠にはめ、個性や共感力を見失ってしまうことがよくある。するとやがて固定概念が出来上がる。その方が人を判断しやすいからだ。共感と受容する心が欠けた社会からは憎しみと誤解が生まれる。極端な例が白人

至上主義を掲げるテロリスト集団でありヘイト集団のKKK（クー・クラックス・クラン）だ。この集団は、特定の人種が他の人種よりも優れていると信じて恐怖と暴力を用いてきた。一方、互いを理解し多様性を受け入れる社会ではチームワークと意識を高めることができる。違いを理由に他人を分別し差別するのではなく、社会はすべての市民を人間として平等に見るべきだ。言葉にすると実現できそうだが、実際に行動に移すのはかなり難しい。人間は完璧ではないからだ。すべての人々のために公平な扱いを求めるということは、場合によっては一部の人の特権をなくすということでもある。今日の社会はそれを実現できるほど完璧ではないが、改善の余地はあるはずだ。

私の人生においては、誰かが何かを言いたいことがあるときは、できる限りその人の言うことに耳を傾けたい。疎外されたり、落ち込んだりする気持ちがどんなものかを私は知っている。だから助けを必要としている人をなぐさめ、せめて寄り添えるように最善を尽くしたい。昔親切な人に助けられたことがある。私はその時の思いやりを誰か他の人たちに与えたい。思いやりと共感誰かの心に小さな変化をもたらし、やがては正義と平等のために闘うような大きな変化をもたらすことができる。

今も世の中を模索している私にとってアイデンティティというパズルは完成してはいない。しかし私はこれからも、新しい人たちとの出会いを通じて意義のあるつながりと知識を身に付けていこう。ネガティブなことに出会うのは決して悪くはないが、ネガティブになるのは良くないことだ。最後にマハトマ・ガンジーの言葉を紹介する。「前向きな習慣を身に付けていよう。その習慣が自分の価値観になるから。前向きな価値観を持ち続けよう。その価値観が自分の運命となるから」

生死に関わる価値観

(原文は英語)

アナスタシア (14 歳)

ウクライナ

2022年2月24日。私と私の世界観、私にとって一番大切だったものを変えた寒い冬の日だった。私の時計で朝5時ごろのこと、窓の外でものすごい爆発音がした。自分が別人になるような気がした。

「戦争がはじまった」という言葉は一生忘れられないだろう。今の自分にとって一番大切なのは命であることに私は気づいた。自分の命だけではない。私にとって大切な人たちの命もだ。それ以外の大切なものはすべて、命の後ろに追いやられ、それまでの悩みごとが消え失せたかのようだった。あらゆることが一日で一瞬にして変わってしまった。私は戦争の中にいるのだ。えっ？ なぜ？ 「愛してる」というあたりまえの言葉でさえ違う意味を持つようになった。自分の国に平和を取り戻すために私はすべてを捧げる覚悟をした。

人生にはいろいろな価値観がある。仕事での成功、高級車、海辺の豪華な別荘という人もいれば、初恋の人や家族、友人という人もいる。しかし「私は生きているよ」と書かれたメッセージを受け取ることが何よりも大切という人もいるのだ。

何百万人もの命を守るために、なぜこんなにも多くの人々が死なねばならないのか。不公平だ。戦場の最前線にいる兵士たちが唯一望むこと、それは生き残って家族のもとへ帰ることだ。何百、何千という罪のない人々の命を奪ったのは、戦争である。もう二度と心臓が鼓動することのない人、もう二度と笑顔を見せることがない人、もう二度と生きる素晴らしさを感じることができない人がいるのだ。もう二度と、だ。血にまみれた死体の代わりに、赤いポピーの花だけが咲き、サラサラと風にそよぐだろう、まるで彼らの最後の言葉を告げるかのよう。

世界の平和と他人への慈悲は最も大切にすべきことだ。戦争がもたらす恐ろしい結末を人々は知る必要がある。私たちはあらゆるものを変えることができる。子どもたちが決して戦争を知ることがないようにしよう。殺し合うのではなく愛し合おう。

変えてはいけない価値観

(原文)

染谷 真由 (14 歳)

茨城県

常総学院中学校

5 月の連休中に祖母と散歩をした。田んぼには、水がはられていて、その水が 5 月の空や新緑を映して揺られていた。風が気持ちよかった。小学校の前を通った時、私は、小学校の前に大きな石碑があったことを思い出した。6 年間、毎日、当たり前のように通っていた場所なのに、意識したのは初めてだった。私は、祖母に何の石碑なのか聞いてみた。祖母は、少しだけ顔を曇らせながら、この場所は戦争で亡くなった人の魂をお祀りしてある碑が建てられているのだと話してくれた。祖母に誘われて、石碑の近くまで行ってみた。3 メートル近くもの高さがある立派な石碑が立っていた。石碑には「忠魂碑」と書いてあった。もう建立されてから随分と経っているようで、石の表面には薄緑色の苔が生えていた。

「すごく大きいんだね」と私が思わず言うと、少し間があった後、祖母が「こうでもしなくちゃ、戦争で子どもが亡くなった親の気持ちは収まらなかったんだよ。今だって、亡くなった人への悲しみや辛さはまだ消えてないんだ。この地域の人達も戦争で大勢亡くなったんだよ」と言った。隣にももう一つ石碑があって、戦争で亡くなった大勢の人たちの名前が書いてあった。この名前の数だけ人生があったのだ。私は、歴史の授業で戦争について学んだ時、広島や長崎の原爆や東京の空襲で大勢の人が亡くなったことを知った。でも、自分の身近にも戦争の傷跡が残っていたことに驚いた。祖母は、戦争が終わってからも、皆の生活はなかなか戻らなかったということを教えてくれた。戦争が終わってから何年もの間、家も家族もすべてを失った人たちが路上で暮らしていて、毎日のようにおにぎりをもらいに来たそうだ。

「もっと生きたかったらうねえ。もっとやりたいことがあったらうねえ。」

祖母は忠魂碑をそと手でなでた。私も手で触ってみた。少しざらざらしていたけれど温かった。そして、私たちは何も言わずに碑に手を合わせた。

私は、家に帰ってから、インターネットで「忠魂碑」を調べてみた。ネット上に、驚くほどたくさんの「忠魂碑」が示されて、先のとがった印でマップが埋め尽くされた。それを見たときに思わず目を背けてしまった。こんなにたくさんあるの？ うそ……。私の小学校があった常総市には、18 か所、つくば市は 50 か所近くあった。日本には、こんなにもたくさんの戦争の傷跡があったのだ。そしてその傷跡は無言で、でも姿を消すことなく残っているのだ。戦争があったのは、遠い昔ではなかったとい

うことだ。そして平和は絶対的なものではない。

テレビでは、連日、ウクライナのニュースが流れている。無抵抗な市民が手足を縛られて殺されていたという報道もあった。私は怖いと思った。ウクライナの人達は何も悪くないのに、今日だって私たちと何の変りもない幸せな生活を送っていたはずだったのに。戦争がそれを奪った。私は信じられないような残酷なニュースの報道に胸がしめつけられる。学校で SDGs を学んでも、何もすることができない自分の無力さをかみしめる。一刻一刻、大切な命が奪われていっているのに……。祖母は、ウクライナで起こっていることと自分が体験したことが重なって見えると言っていた。

明治時代、お米一俵は 2 円で買えたという。家は 1 千円あれば建った。今、1 万円あっても家は建たない。お金の価値が変わったのだ。お金や物の価値観は変わっていく。でも、変わってはいけない価値観がある。人の命、平和の大切さは最も大切にされるべき価値観だ。しかし、命よりも国の利益が上になってしまうことは実際に、起こりうるのだ。私たちは大事な価値観を全力で守らなければならないと強く思う。

今を生きる：出会ったチャンスを生かすことの大切さ

(原文は英語)

早川 瑞希 (14 歳)

東京都

洗足学園中学校

「これまでに自分がやり遂げたことや最近一生懸命取り組んだことを自由に書いてください」。周囲に目をやると、どの子の鉛筆もすぐさま動き出している。私は焦った。自分は特別すごいわけではないからだ。何かとんでもないことをやり遂げたわけでもないし、他の子にない才能があるわけでもない。しかし、この時の私が知らなかったことがある。それは、生きることは運や才能がすべてではないということだ。挑戦や冒険に満ちた生き方をするのに必要なのは運や才能ばかりではない。私たちが成功と考えることを達成できるかどうか、そして、自分の生き方に満足していると言えるかどうかは、すべて私たち次第だ。才能に恵まれて生まれてくるかどうかを自分で決めることはできないが、生まれた後にどう生きるかは自分で決めることができる。私たちは生きているうちにとても多くのことができるが、それは自分から進んでそうしようと思えばのことだ。自分や周囲の人たちのためになるあらゆるチャンスを生かそうという気持ちがあつてこそだ。その気持ちを大切にすれば、結果的にずっと充実した、冒険に満ちた生き方ができるようになるだろう。

私がこのように考えるきっかけとなった、人生を変える経験は、ある友人との出会いだ。同い年の子で脳腫瘍があり、入退院を繰り返していたので何日も学校に来られなかった。しかし、いろいろなことにチャレンジするよう私たち全員にやる気を与えてくれる子だったので、クラスには欠かせないメンバーだった。演劇クラブのオーディションを誰か受けてみないかと言われたときに真っ先に手を挙げたのは彼女だった。担任の先生がチャリティマラソンのボランティアを探していたときに大喜びで参加したがったのも彼女だった。そうする理由を彼女は、あとどれくらい生きられるかわからないからだと言った。限られた時間の中でできるだけ多くのことにチャレンジしたい、そうすれば他の子たちが生きている間に経験できるのと同じくらいの経験を自分もできるからというのだ。しかし彼女が言ったことを考えると、それは彼女にだけ言えることではないと私は気づいた。むしろそれは誰にだって当てはまることだ。なぜなら誰にも明日死んでしまう可能性があるからだ。

チャンスはどこにでもころがっている。私たちは毎日必ず多くのチャンスに出会っている。そこでの違いは、それを生かすか、ただ突き放してしまうかだ。ある意味、人間との出会いに似ている。人間は世界中どこにでもいるが、関わり合いを持てるのは一握りだけだ。電車で誰かと出会っても、普通ならその人に会うことは二度とないだろう。チャンスもこれと同じだ。一つのチャンスに出会って

も、同じチャンスはもう二度とめぐって来ない。だからこそ少しでも自分や他の人たちの役に立ちそうな何かに出会ったら、それを生かそう。そうすれば、数え切れないほどの教訓や知識、経験が得られる可能性がある。チャンスを生かさなければその可能性はないだろう。

できるだけ多くのチャンスを生かすというのは難しいことだが、そうした経験から学んだことはたいてい、人生を変えるような教訓となる。何か新しいこと、これまでに経験したことのない何かに挑戦するのだから批判されることもあるだろう。やる気を失くして心がくじけることもあるだろう。しかし、そうした批判はさまざまな形で役に立つものだ。批判に対して強くなり、自分の弱点に気づき、批判を生かして成長することができる。新しいことに挑戦したからといって批判されるばかりではない。十分に経験を積めば、必ず成功が訪れる。自信がつき、さらに挑戦しようとやる気がわいてくる。その結果、前向きなサイクルが生まれ、もっと充実した生き方をしよう、もっと自分自身に満足しようと思えるようになる。

「あのボランティア活動に参加しておけばよかった」と後悔してみたり、「本当はあのクラブに入りたかった」と後で考えたりすることは誰にでもよくある。過去にってしまったことは変えられない、後悔しても何も変わらない。しかし、これからすることは変えられるし、これから訪れるチャンスは進んで生かすことができる。私たちが日々出会うそうした小さなチャンスは、私たちの人生を変える力を持っている。そうしたチャンスを生かしていくことが、私たち全員が生きていく中で絶対に大切にすべきことだ。

わたしの大切な価値観

(原文)

吉田 朋加 (14 歳)

東京都

晃華学園中学校高等学校

「価値観」は人それぞれ異なる。「価値観」は周りの環境、学校、友人の影響や、それまでの自分自身の経験によって少しずつ作り上げられていくものだと思う。なので、同じ両親に育てられても兄弟がみんな同じ価値観を持つとは限らない。

私の「価値観」の根幹となっているものは、やはり身近にいる家族だ。その中でも父の影響は大きい。父は、外科医として総合病院に勤務し、命に関わるような大きな手術をしている。父は私から見ると、家族より仕事=患者さんを優先していると感じるほど仕事に熱心だ。勤務日でない土日でも術後や入院中の患者さんのために病院へ行く。家にいる時でさえも手術のビデオを見たり手術本を読んだり、日々研鑽を積んでいる。そのような仕事へ取り組む真面目な父の姿を見て、患者さんへの「誠実さ」であったり、「思いやり」や「責任感」を持って行動することが、どういふことを学んできたように思う。

仕事ばかり優先しているように見えた私は、以前父になぜそこまで仕事をするかを聞いたことがあった。それに対し「患者さんを治すのが医者者の使命だからだよ」と父は言った。父もまた医師である祖父、曾祖父の後ろ姿を見ながら、その行動の元となる「思いやり」や「責任感」の価値観を得たに違いない。

また、私は三姉妹の次女として育ったこともあり、常に多くの考え方に触れてきた。自分の意思を主張する姉、同じく意思を主張するが困ると頼ってくる妹、三人の考え方がバラバラで度々喧嘩にもなった。そんな時に場を収めるのは私の役割だ。私は常に中立の立場で、まず相手の気持ちや話を聞いてから、相手がどんな言葉を言って欲しいかを考えて意見することが多くなった。これは、育つ中で出来上がった「調和」という価値観だ。この価値観のおかげで、小学校時代も現在も友達と良い関係が作れているように思う。

昨年の夏、国立市の高齢者施設でボランティアをした。コロナ禍であるため、対面でのボランティアが出来ず、自分が高齢者だったら何が嬉しいだろうと想像してみた。交流ができない分、目で見て喜んでいただけるものを作りたいと思い、施設に通われている方一人一人にお誕生日カードを制作して施設に届けることにした。高齢者の方々が読みやすい文字の大きさとメッセージを書き、カラフルなカードにケーキや花束を折り紙で折って貼り付けた。このカードを受け取って喜んでくれる顔を想像す

ることで自分の心にやる気が湧いてくるのを実感した。他人に喜んでもらいたいという想いは、いつの間にか自分自身の心まで満たしてくれていることに気づけた。この時私は、父の患者さんに対する気持ちを少しだけ理解できたように感じた。父のように命を救うほど大きなことは出来ていないが、身近なところで他人に喜んでいただけたという初めての感覚だった。私の中にある「思いやり」や「他人の喜びが自分を幸せにする」価値観に気づけた瞬間だった。

私は「優しさ」や「思いやり」が溢れる平和な世の中になって欲しいと思っている。テレビをつければコロナや戦争と、つい目を背けたくなるような悲惨な現状も映し出される。この時代に生かされる私たち一人ひとりには、未来を平和な社会にする責任や使命がある。つまり、私たち一人一人が「優しさ」と「思いやり」を持って行動が出来れば、その行動で笑顔が増え、思いやりの連鎖で必ず平和な社会ができると思う。そのような社会を作りたい。私には、まだ世界に目を向けるような大きな行動は出来ないが、ボランティアの時に感じた他人が笑顔になる行動を身近なところから続けていくことが、平和な社会に繋がると信じて身近な人を笑顔にすることを実践していきたい。これが私らしい生き方だと言えると思う。そしていずれは、私も父のようにたくさんの命を救える「優しさ」と「思いやり」に溢れる医者になりたいと思う。

私の価値観、私の人生

(原文は英語)

エニオラ・オルワトミシン・デボラ (15 歳)

ナイジェリア・オスン州

デスティニー国際大学

私は12歳の時に、価値観を持つことの本当の意味を理解しました。私は私よりも年上の子どもが2人いる伯母と一緒に暮らしていました。いつも私がやっていないことで叱られていましたが、置かれている状況のせいで、いつも泣くのを我慢していました。恐ろしい交通事故で亡くなった両親のことを考えると、いつも胸が張り裂けそうになりました。彼らはとても良い両親で、どう振る舞うべきか、どう振る舞ってはいけないかを教えてくださいました。

あの最悪の日、両親が友人の結婚式に出席するためにラゴスに向かう途中で亡くなったという知らせは、大きな衝撃でした。親戚の中で唯一心配してくれた伯母が私を迎えに来てくれました。伯母は実の母にはなり得ないということは分かっていたましたが、どんな状況にも立ち向かっていこうと私は決心しました。

両親が亡くなる前はいつも優しくした伯母が、突然恐ろしい人になりました。私を学校に通わせるのはお金の無駄だから家にいるようにと言われた時はショックでした。不満でしたが、伯母の命令に全て従うしかありませんでした。私は全ての家事をやりました。みんなの服を洗濯し、家族の食事もしました。

それは、ある晴れた月曜日でした。家にいたのは私一人でした。座っていろいろとやるべきことを考えていると、突然、外でおじいさんと小さな子どもが道を渡ろうと待っているのが目に入りました。私には車が近づいてきているのが見えたのですが、どうやらおじいさんはあまり目が良くないらしく、車に気づいていないようでした。私は全速力で外に走り出て、車に引かれる直前のところでおじいさんを引き戻しました。

私は人の命を救うことができたことがとてもうれしく、母が私にほほ笑みかけてくれているのが目に浮かびました。私は空を見上げてほほ笑み、走って家に戻りました。その同じ日、私は仕事から帰った伯母からテーブルの上に置いてあったお金を盗んだと非難されました。その日、それよりも前にテーブルの上にお金が置いてあったのを見たのは確かでした。伯母の子ども1人がそれを自分の学費だと言って持って行ったことも覚えていましたが、私はその時彼をそれ以上問いただすことはしませんでした。伯母は私に、その日のうちにお金を返すように言い、それができなければ家から追い出すと言いました。私は誰がお金を持って行ったのか伝えましたが、伯母は信じてくれませんでした。

次の日、伯母にすぐに家を出ていくよう言われました。家にいさせてほしいと頼みましたが、私の願いは聞き入れられませんでした。私は伯母の家を出ていくしかありませんでした。

私は行く当てもないまま家を出ました。私を家に泊めてくれる善きサマリア人を探して7時間ほど歩き回りましたが、誰も私を助けてくれそうにありませんでした。しかし、ありがたいことに、歩いていたところを1人の男の人が声をかけてくれ、家に連れて行ってくれました。なぜ当てもなく歩いていたのか聞かれたので、これまでのつらかった体験を全て話したところ、私の年でこれだけの困難に直面しながらもこのような性格でいられることに驚いていました。彼は私の話にとっても感動し、これらの教訓を彼の人生のあらゆる側面に生かすことにしました。

彼は私を大切にしてくれました。食事を与え、服を与え、町一番の学校にも通わせてくれました。私は人生の中でもう一度、父親という存在を感じることができました。そして、優しさ、正直さ、誠意は報われるということが分かりました。正しい価値観を持っていることは、黄金を持っているようなものなのです。

21 世紀を生きるためのわたしの「価値観」

(原文)

片山 芽生 (18 歳)

東京都

晃華学園中学校高等学校

私たちはものごとが常に目まぐるしく変化する社会の波の中で生きている。昨日まで正しいと信じていたことが覆され、無敵だと思っていたものが崩され、当たり前だと思っていたことがそうでなくなる。逆に、昨日まで成し得なかったことができるようになったり、わからなかったことがわかるようになったりすることもある。こうした変化は、世界規模で起こることもあれば、個人の中で静かに起きることもある。私の中で変化が起きたときと言えば、例えば、学校で新しいことを学んだとき、新聞の社説で自分が思ってもみなかったような考えに出会ったとき、メディアで世界の悲惨な貧困の現状やむごたらしい戦争の跡を見たときだ。その度に、私の中で何かが音もなく崩れたり、むしろ今までバラバラだったものが一気に定まった形になったりして、私の「価値観」は形成されてきた。価値観というと、人が何かを信じ、それをあらゆる判断の基準とするイメージがある。だが、私は何か一つのことにとこだわってものを信じたり、それを日々の拠り所とするよりも、むしろ、毎日少しずつ時代に合わせて、人々に合わせて、自分の成長に合わせて、ものの見方、考え方、行動を変えていきたい。こう言うと、周りに流され、自分を見失いがちな人のように聞こえるかもしれない。だが、変化の目まぐるしい日々において、頑固に一つのことにと固執するよりも、周りに目を向け、耳を傾け、その都度正しいと思うことをそのときの自分の「価値観」にしたい。

私がこのことを強く感じるようになったのは、4カ月前から続いているロシアによるウクライナ侵攻がきっかけだ。世界史を学んでいると、世界規模で見て100年と平和な日々が続いた時代なんてないが、それでも21世紀は大丈夫だと思っていた私にとって、いとも簡単に平和が崩れてしまったことがとても衝撃だった。しかし、つい最近になって日本に住む私たちもどこかアメリカ寄りの偏った視点でロシアを見てしまっているということに気がついた。そして、この戦争で多くの人がロシアに対する批判的な考えを持つようになり、何かと「ロシアが」と私たちは言うようになったが、ロシアの国や人々そのものが非難の対象になっていいはずなんてない、と強く感じるようになった。幼いころからクラシックバレエを習い、ロシア人の先生に教わることもあった私にとって、今でもロシアの文化や芸術には敬愛の念を抱いている。また、冷戦直後の米露間の対話を見ると、決して今の戦争がロシアだけに責任があるわけではないこともわかった。また、世界史を学び、ロシアとウクライナの今まさに問題となっている民族の認識の違いが中世の、特にカトリックとギリシア正教の伝播にまで遡るこ

とができることもわかった。そして、新聞からこの戦争が台湾や沖縄の情勢にまで大きな影響を与えていること、ヨーロッパの諸国がウクライナの人々の受け入れや援助を急ぐ中、ウクライナに住む一部のアフリカ系の人々へ救いの手が差し伸べられなかったことや、援助のやり方にはそれぞれの国の政策や外交上の思惑があることも知った。この4ヵ月で私の頭や心は世界で日々起こる様々なことでいっぱいになり、その度に新しい感情がふつふつと私をうずまいて、私は少しずつ変化したり、バージョンアップしたりする私の考えや感じ方に動揺するほどだったが、その過程で私は新しい自分の価値観に出会うことができた。そして、今、私はこれからも変化していくであろう私の感じ方や未来の私の「価値観」にワクワクしている。平和を願う気持ちや世界をよりよくしたいという想いはずっと変わらなくても、世界に対する向き合い方を常に微調整していくことこそが、日々変化する世界の様々な問題を解決していく手がかりであると信じている。そして、そのためには日頃の学びを大切に、新しい知識を身に付け、多角的な視点を持つことを忘れずにしたい。

私の価値観—命をつなぐための指針

(原文は英語)

ガマリエル・ジョーダン・B・ラングイド (22 歳)

フィリピン・セブ州

セブ・ノーマル大学

まだ私が子どもだった頃、私の祖父がある質問をしてきた。「もし鳥の巣を見つけたらどうする？」この質問に幼い私の心はうきうきした。なぜなら、ずっと前から巣を取ってその中にいる鳥と卵をカゴに入れて飼い、近所の人たちに自慢したいと思っていたからだ。子どもにとって鳥の巣は、何日も何日も森の中をくまなく歩き回ってなんとか手に入れられる狩りの戦利品だった。そのため、私はすぐにこう答えた。「夕暮れ時に巣を見張って、鳥が戻ってきたら手で捕まえる。」と答えた。すでに炎が消えそうな口ウソクのような祖父は、知らぬ間に衰えて死んでいく人たちを見てきたので、まるでこんな残酷な話は聞いたことがないともいうように、私の答えに顔をしかめた。そして、全ての生き物、つまりは地球全体に対して、優しく、情け深く接し、育てる心を持つべきだと私に説いた。その瞬間に私の人生は一気に変わった。もう鳥の巣を手に入れることを切望する少年ではなくなった。私の祖父は、命を大切にし、それを維持する方法を私に教えてくれた。

大人になった今、あの祖父の質問は自分の中でまだ鮮やかに生き続け、私の胸の中で翼を生やして、勢いよく羽ばたいている。何か困ったことがあると、決断をする前にいつも祖父の質問を思い出す。「もし鳥の巣を見つけたらどうする？」あの時の自分の答えは恥ずかしいが、祖父が私に教えてくれた価値観は、とても啓発的で、私はそれを使って地球をもっと生きやすい星に、つまりは全ての生き物が栄え、邪魔されることなく有意義な一生を送ることができる、住みやすい社会にしようとしている。

私は、ちょっとした親切な行為は、偏見や人種差別などを正し、時には事故を防ぐことができる癒しの要素だと信じている。ある夜、町から車で帰宅していた時のことをまだ覚えている。ライトがついていない自転車に乗っている若者がいた。不規則な街灯の明かりだけを頼りに自転車を走らせている彼にとって、その道路はいつ車にひかれるか分からない、とても危険なものだった。ちょっとした親切心から、私は車の速度を落として彼の後ろにつき、彼が家に着くまで車のヘッドライトで道を照らしてあげた。またある時は、子どもたちに石を投げつけられ、追いかけている野良猫に遭遇したことがあった。いたずらっ子たちが私の目の前を通り過ぎる時、私は喜んで不運な猫が逃げて行った方向を教えてあげた。そして、彼らが去った後、鞆の中からそのかわいそうな生き物を取り出し家まで連れて帰った。名前を名乗らずに行う人助けは、また違った輝きをもたらす。人々が親切と思

やりに価値を置きさえすれば、良いことしか起きないだろう。

ウクライナやアフガニスタン、シリア、パキスタンなどの戦争中の国々が必要としているのは、小さな優しい行為だ。減少し続けている熱帯雨林を再び豊かにするために必要なのは思いやりだ。私たち人間は、無情な生き物である以上にもっと良いものになれるはずだ。命を大切に、国連が定めた持続可能な開発目標に切迫感を持って取り組めば、地球はまた息を吹き返すことができる。私たちにはもうあまり時間がない。私たちが行動を起こさなければ、全ての生命は滅び、それは私たちの自滅を意味する。人は欲望を達成するために無情になる必要はない。そして、全ての欲望が残酷さから生まれるわけではない。私たちは、いつでも無私無欲な平和を愛する人になることを選ぶことができる。相互につながる強い世界を構築するためには、世界市民として優しく思いやりのある人間にならなくてはならない。

私はごく普通の人間であり、世界をより良くしようと作文を書いている他の若者と同じように、世界に向けてこの作文を書いている。どうか私たちの声に耳を傾け、私たちの価値観を尊重してほしい。私たちは、それぞれ別の場所に散っていくためだけに集められたわけではない。分断された世界を再び一つにするためにここにいるのだ。困った状況に追い込まれた時は、祖父が私に教えてくれた巣の扱い方を思い出してほしい。そうすれば必ず命をつなぐことができるだろう。

倫理規範

(原文は英語)

トウイシミレ・テオジーン (23 歳)

ルワンダ<中国浙江省在住>

杭州師範大学

子どもの頃、私の母は地元のリーダーであった。善い行いをし、自分と地域に正直であることの大切さをいつも語ってくれた。「『自分は善い行いをしている』と社会を騙すことは簡単だけど、自分自身をごまかすことはそれよりもっと簡単だ。だからこそ、正直で善い人間でいなさい。いつかそれは自分に返ってくる。」人は自分で種をまいたものを収穫する。嘘に導かれて生きると魂は真の喜びを得る機会を得られないと母は教えてくれた。

私たちの地域では、善い行いをしている人の多くを「イニヤングムガヨ」と呼ぶ。それはキニヤルワンダ語で「高潔な人」を意味する。善い行いをしている人々に囲まれて育ったため、この言葉を耳にすることが多かった。そして、大人たちの会話に参加することができなかった私は、純粋に知りたいという気持ちで耳を研ぎ澄まし、いつも彼らの会話を聞いていた。

私がよく話を聞いていた人の中に、パスカルという名のはっきりとした話し方をする背の高い褐色人男性がいた。幼い私にとって、彼はずばぬけた存在で高潔の見本のような人であり、彼に憧れていた。しかしその後、彼が国外へ逃亡して行方不明になっていることを知った。1994年にルワンダで起きたツチ族に対する虐殺に参加していたからだ。そのことを知って、私は初め衝撃を受け、その後困惑した。自分が高潔の見本としていた人が、人が想像し得る最も邪悪な行為に加担していたなどなぜあり得るのか。彼は高潔を説きながら、多くの人を殺したと言われる人間だった。この事実は、どんな状況が背景にあったとしても、子どもの私にとって理解できるものではなかった。

もし、パスカルがいつも自ら説いていた価値観に基づいて生きていたのであれば、私は衝撃を受けることも失望することもなかったかもしれない。

私たちは、時に人に良い印象を与えるために行儀良くふるまって見せる。しかし、一番大切なのは全ての行動の裏にある心であり、それはどんなにベッドが心地良くても、そこから起き出る動機となるものなのだ。

高潔という価値は、私が非常に大切にしている価値観の一つである。そして、価値観は口先だけの原則で終わってはならないことをパスカルから学んだ。私は毎日、倫理規範つまり人の尊厳を反映していると一般に認められている原理に沿った行動を取るよう心がけている。

私にとって「高潔」とは、口にするのは簡単でも行動として実現するのは難しい、ただの言葉では

ない。それは、自分の日々の行動を常に導く指針である。どんなに小さな行動であっても、私は高潔さを持って行動しようと努力している。

高潔さを持てば、人は自分自身や周りの人に対して正直になる。自分が好むこと、好まないことを本音で相手に伝えることができる。そうすることで、周りの人々も私たちに対して好まないことを伝えることができ、お互い手を取り合っ​​て紛争に発展しかねない問題を正し、協調して生きることができるのだ。

高潔であれば、同じ人間として人々を尊重し、彼らの尊厳を認め、彼らの悩みに耳を傾けることができるようになる。人は高潔でないと、自分の悩み以外は無意味なものだと容易に考えてしまう。しかし、実際は人生の喜びを損ねる恐怖や不安、重荷は全て、それが誰のものであれ意味を持つものであり、高潔さを持つことでそれらに気づき、取り組むことができるのだ。

全人類が言葉だけでなく、日々の行動において高潔さに導かれる世界を私は夢見ている。外交が国際政治の中心にあり、政治家は戦争を正当化するのではなく、国民が問題に気づく前にそれを解決し、肌の色や身長、年齢などに関係なく全ての人の意見に耳が傾けられ、皆が理解されていると感じる地域社会。偽善は存在せず、皆が正直であり、間違いを犯してもそれを認めて謝罪することができる世界。これが私の願いである。

私の価値観

(原文は英語)

ウデオビ・オビオマ・ジェニファー (23 歳)

ナイジェリア・ラゴス州

私は複数の価値観によって形作られていますが、最も大切にし、私の中に深く根差している価値観は、勇気、忍耐、そして誠実さです。私が覚えている限り、これらの価値観は私の充実した影響力のある生き方の道標となってきました。

私の母について触れることなくこの作文を書くことは考えられませんでした。母は私の精神的支えです。信心深い人で、長年にわたり虐待を伴う結婚生活に耐えていました。しかし、たった一人で、かつ教員の給料のみで4人の子どもを育て上げるという負担から、一度も逃げることのなかった女性です。これは勇気と忍耐を必要とすることであり、これらの素晴らしい価値観は私の礎となっています。母は「ただ自分がすべきことをし、それがうまくいかは神を信じて委ねなさい」と私に教えてくれました。この教えは、新しい人生の門出という恐怖や怪物のような父との生活という恐怖、そして現在では、神に与えられた使命を自分が全うすることができるかという恐怖など、長年にわたって困難や恐怖を乗り越える時に私に力を貸してくれました。インスピレーションを与えてくれる人の存在には、どうしようもない境遇を超えて私たちを向上させてくれる力があります。そして、私にとっての母がそうであるように、全ての人にこのような存在が必要だと思います。女性尊重主義の支持者として、自分の持つ基礎を活用し、若い女性や虐待にあっている女性たちが忍耐と勇気を持てるよう支援したいと思います。なぜなら、充足感を得て、本当の自分らしく生きるためには勇気と忍耐が必要だからです。

私の母は、いつも私たち子ども全員に誠実さを教え込もうとしました。しかし、ナイジェリアのような腐敗と無能によって常に打ちのめされるような国に生きてると、人はその渦に引き寄せられてしまうのです。私が誠実であり続けることができている理由は、人とは違う自分での必要性を常に感じていたからであり、私が望む変化を体現したいと思っていたからです。数年前に同級生と交わした会話を今でも覚えています。彼女は彼女の両親が子どもを売買する仕事をしていると私に自慢したのです。そうです、自慢してきたのです！どうやら子どもの売買は「もうかる仕事」だったらしいのです。この不快な会話の後に少し調べてみたところ、ナイジェリアでは私が生まれる前から児童の人身売買が行われてきたこと、そして年々状況が悪化していることを知りました。若い女の子たちは誘拐され、偽の児童養護施設や民間病院に隠されます。彼女たちはそこで性的虐待を受けて強制的に妊娠させられ、赤ん坊はどのような人間であろうと関係なくお金さえ用意できればその人に売られてし

まうのです。また、当然ながら児童福祉がナイジェリア政府にとって最も優先度の低い問題だということも調査によって分かりました。その時、私はこの国で腐敗することのない変化の力となることを自分に誓いました。それ以降、さまざまなソーシャルメディアを活用して、児童の人身売買に対する認識を高めようとしてきました。しかし、私にはさらに大きな計画があります。私は現在、ラゴス大学で石油・ガス工学を専攻しています。私の計画は、石油産業に参入して富と人脈を手に入れ、ナイジェリア中の恵まれない子どもたちのためにさまざまな施設を作るプロジェクトを立ち上げることです。これらの施設は、恵まれない子どもたちの更生・発育・発達のための安全な避難場所を提供することに焦点を絞ったものになります。長期的に見れば、この計画は児童の人身売買だけでなく、それ以上の問題に取り組むことになるでしょう。なぜなら、ナイジェリアをより良い国に変えられる唯一の希望は、今の若い世代と次世代の人々だからです。

「人のため、世のために役立つことをなすことが、人間として最高の行為である」これは日本人の慈善家であり企業家である稲盛和夫先生の格言です。使命とは神から与えられた才能を使って人を助けたいという衝動です。私を含む多くの人はその使命を知る幸運に恵まれています。ですが、自分の使命を知るだけでは不十分であり、それを果たすことが大事なのです。そして、使命を果たすためには基礎となる価値観を持つことが必要です。快適さよりも勇気を、楽なことよりも正しさを選ぶ必要があるのです。私にはこの国を変える力になるという使命があり、その使命に忠実であり続けることが私の価値観であると思います。